

市之郷廃寺と推定餅磨郡家（豆腐町遺跡）

寺岡 洋

はじめに

前号で取り
上げた芦屋
廃寺址と深



江北町遺跡は、芦屋川西岸の山手と海岸寄りに近接する。深江北町遺跡は「驛」を記した多くの墨書土器と木簡から葦屋駅家（あしやのうまや）址であることがほぼ確定した。

芦屋廃寺の創建は、文献資料や周辺遺跡の状況から葦屋漢人（あしやのあやひと）集団が主導したと考えられ、葦屋駅家の「驛長」も葦屋漢人集団から任命され、駅家の維持・運営に関わったのではないかと推測できる。

菟原郡家（郡衙）の所在も郡司（四等官で構成）の長官・次官である「大領」「少領」を記した墨書土器（寺田遺跡）や、「王子三年」銘木簡（三条九ノ坪遺跡）などの出土から、芦屋川右岸に存在した可能性が高いと思われる。「王子（じんし）三年」は、白雉三年（652）で、国・評（郡 こほり）制が整備されつつある時期になる。

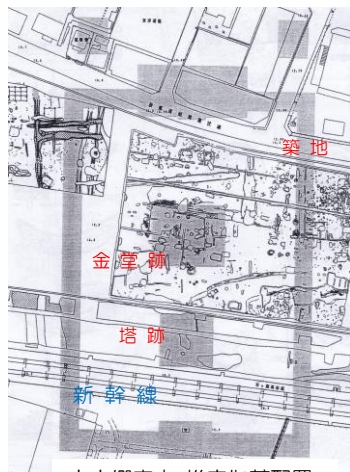
播磨では古代寺院と駅家が隣接する例は前号で例示したように多いが、郡家（ぐうけ）が隣接する例もある。今回は、寺院と推定郡家が隣接する例を播磨でみている。

市之郷（いちのこう）廃寺

■市之郷遺跡

市川（風土記の小川）の西岸、沖積作用による微高地上に立地する。

市之郷廃寺址は市之郷遺跡と呼ばれる広範囲な遺跡の一部であり、JR高架工事や都市再開発事業に伴い多くの発掘調査が行われた（上記地図）。



市之郷廃寺 推定伽藍配置

□姫路警察署庁舎所在地 —飛鳥時代の豪族居宅—

古墳時代後期の竪穴住居跡が23棟、掘立柱建物跡が33棟検出されている。住居跡は切り合い関係（遺構が重なる）にあり、掘立柱建物跡が新しい。

掘立柱建物には側柱建物と総柱建物があり、側柱建物は居住施設もしくは作業施設、総柱建物は倉庫とされる。

6世紀後半以降には複数の倉を含む建物群が出現しており、豪族居宅と考えられている。時代の下る建物群は、「市之郷廃寺とほぼ同時期に位置付けることが可能ではないか」とされ、寺院建立を主導した氏族の拠点と想定されている〔兵庫県2011〕。

市之郷廃寺の調査

JR姫路駅（左図左端の赤枠 豆腐町遺跡）から東へおよそ1.5km。市之郷廃寺のほぼ中心部が調査され、現在、ものづくり大学校が建つ。市之郷の「市」は、「餅磨の市」に由来し、「枕草子」にも登場する。

市之郷廃寺については早くから注目されていた。鎌谷氏の描写では、「鉄道線路の南側に当たり孤松の聳えてゐるのが望見される」とあり、今では想像もしにくい（補注の写真を参照。家が一軒も写っていない）。鎌谷氏の「踏査記録と寺址附近地籍図」は伽藍配置の復元に際し貴重な資料になった〔鎌谷1942〕。

調査の経緯

□鎌谷氏踏査記録 土地所有者からの聞き取りにより、塔心礎の本来の位置（塔跡）について、当時残っていた土壇（地籍図の「堂・山」）の南であったことが確認された。塔と金堂が南北に配される寺院の伽藍配置は、四天王寺様式か山田寺（特別史跡 桜井市）様式になる。

□姫路市新福祉センター建設地（左図 西築地の北辺）

奈良時代の掘立柱建物跡2棟、区画溝4条、大量の布目瓦、鴟尾片が出土し、区画溝東方に寺院の存在を推定。

□JR山陽本線軌道跡 東西に長い調査区（A～E区）のうちD区（10m×220m）で、南北に平行する2条の溝と瓦溜りなどが検出された。瓦類は、軒瓦をはじめ大量に出土した。区画溝については、「築地遺構の一部の可能性が考えられる」と指摘された〔兵庫県2005〕。

□ものづくり大学校所在地〔兵庫県2013〕

「報告書抄録」を引用。「伽藍の中心部分を調査し、金堂跡と考えられる仏堂基壇跡や築地跡を検出した。瓦は主として瓦集積や瓦溜りおよび包含層から多数出土し、軒丸瓦や軒平瓦、丸瓦や平瓦にまじって鴟尾や道具瓦なども出土した。塔跡は発見できなかったが、（塔相輪の）水煙（すいえん）が出土したことにより存在が確定できた」。

仏堂基壇跡（金堂跡）

残存基壇の規模は、上端面で東西約19.5m、南北約15m。東側と南側は削平されており、東西21m以上、南北約20mと推定されている。

基壇基部は主として地山を削り出して造成されている。礎石が1点残存した。周囲に礎石の抜取穴と判断されるものが4基ほど存在する。

築地跡（溝跡）

調査区中央付近の北端から南にかけ、直線で約25.0mにわたる溝が検出された。築地に伴う溝跡であり、仏堂基壇の南北方向とも一致する。仏堂基壇の西辺から築地の中央までの距離は約52.8mになる。

伽藍配置の推定

確認された仏堂跡を金堂とし、JR高架事業調査時の瓦集中部分の中心を塔跡と推定する。同一縮尺で四天王寺の伽藍配置を重ねたのが、「推定伽藍配置図」になる。

この推定図によれば、築地に囲まれた範囲は東西約7.5m、南北約11.0mになる。中門跡は新幹線のすぐ南側になり、現薬師堂は鐘楼の位置と重なる。

軒瓦の分類・年代

分類 軒丸瓦を9型式(NM1~9)、軒平瓦を7型式(NH1~7)に分類し、年代順に三期(第I~III期)とする。第I期はさらに2時期に細分(第I-1・2期)し、寺院の創建・伽藍整備を想定する。第II期は「播磨国府系瓦」、第III期は「続播磨国府系瓦」をあてる。

年代(右図上よりNM1~4)

・第I-1期 素弁八葉蓮華文軒丸瓦(NM1・2) 成立時期については、「中房蓮子数が1+4+8である点や、枷型(かせがた 木型の外枠)を利用して成型される点を考慮すれば、7世紀後半に位置づけたい」とされている。

素弁系の軒丸瓦については、**法興寺址**(朝来市和田山町)出土瓦とも比較検討されている〔兵庫県2005〕〔補注〕。

・第I-2期 素文縁複弁八葉蓮華文(NM3・4・5) NM4が辻井廃寺Ⅱ型と同范であり、NM5が見野廃寺出土瓦と同范。年代は、「素文縁複弁八葉蓮華文であることから7世紀末~8世紀初頭あたりに位置づけられよう」とされる。辻井廃寺は西へ約4km、見野廃寺は東へ市川を渡り約3kmと共に飾磨郡に位置する。

・第II期 「播磨国府系瓦」のうち長坂寺式軒丸瓦(NM6)が最も多く出土し、次いで北宿式軒丸瓦(NM7)が次ぐ。長坂寺遺跡は邑美(おうみ)駅家(明石郡)、北宿遺跡は佐突(さつち)駅家跡(印南郡)である。

年代については、「国府系瓦に関する瓦葺駅家の文献的年代も考慮し、8世紀中葉~9世紀前半としておく」。

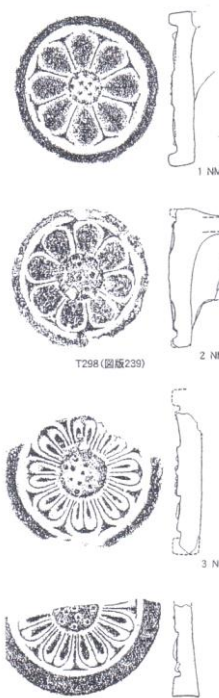
駅家が整備され、瓦葺になるのは邑美駅家(長坂寺遺跡)などの調査では8世紀中頃~後半とされる。

第III期は「続播磨国府系瓦の一群に含まれ」、9世紀中葉を大きく下らないとされる。市之郷廃寺はこの時期まで維持されていたことが確認される。

豆腐町遺跡—飾磨郡家か

JR姫路駅構内と周辺は駅高架事業・再開発に伴い、兵庫県と姫路市による大規模な調査が行われた。遺跡の名称は江戸時代の町名に由来する。播磨国府推定地(本町遺跡)は北へ約800m。

調査では飾磨郡家あるいは播磨国府に関連すると考えられる遺物・遺構が多く確認された。(↑墨書土器「郡」)



姫路市調査

(2009~2010年)

新駅ビルが建つ地点で2本の溝(幅最大で5.8m 道路跡)の両側に9棟の建物が軸をほぼ北にして建っていた(遺跡はさらに東西に広がる ●は井戸)。

遺物は官衙遺跡で出土するものが多い。人名・年齢などを記載した漆紙(うるしがみ)文書、墨書土器、奈良三彩、井戸からは祭祀に使われた斎串(いぐし)や横櫛、和同開珎・萬年通宝などの銭貨、それに大量の製塩土器、漆付着土器、韃(ふいご)の羽口(はぐち)や砥石など鍛冶用具も出ている。役所の工房など付属施設である。

奈良三彩は6点出土しており、うち5点は小壺で仏事に使われたと推測されている。

墨書土器が痕跡のみも含め60点以上出土している。「三宅」「封」は、クラに関連する? **転用硯**も目立つ。土器を転用した硯は携帯用の硯と考えられ、現場で荷札(木簡)などに書く際に使われたのであろうか。

漆紙文書は、漆が付着したため腐らずに残った反故紙。乾燥を防ぐため反故紙で樹液を覆うので漆が染みつく。漆工房が存在していた。反故紙は極めて貴重な文字資料で、有名な「正倉院文書」も反故紙である。

「黒麻呂 十七 少子」「大宅女 十一 少子」など、人名・年齢が記されている。「十七 少子」というのは、年齢により税の負担が異なる当時の税制と関係する。

天平勝宝9年(757)4月までは17歳になると「少子」から「中男」になり、税を負担するが、国家の慶事(立皇太子)により18歳からと一年減税されている。漆紙文書は757年以降に書かれたものになる。

漆紙文書は課税台帳の下書と推定され、戸籍や計帳(けいちょう)を作成するのは郡の主要な業務である。租・庸・調の徴収や出挙(すいこ)の実務は郡家が担っていた。

「田中寺」「寺」「郡」

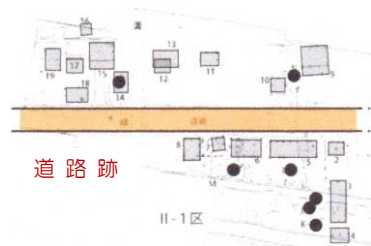
兵庫県教委が調査した東西に長い調査区では、東端になる調査地

A区(おおそ道路遺構東端の南になる)を中心に40点の墨書・刻書土器が出土した〔兵庫県2007〕。

その中に「田中寺」という具体的な寺院名が書かれたものがあり、「寺」「郡」(上図)も出土することを勘案すれば、飾磨(しかま)郡内に「田中寺」が存在した可能性が考えられ、市之郷廃寺が有力候補になる。

播磨国府跡(本町遺跡)の調査では「田中」と書かれた墨書土器が報告されている。「田中」の下が欠けており、寺なのか、人名か地名か分からないのが残念だが、関係あるかもしれない〔姫路市2010〕。

墨書土器「郡」は兵庫県の2014年の調査でも出土しており(←左図)、豆腐町遺跡に郡の施設が存在したのほぼ確定的と思われる。飾磨郡家の役人は市之郷廃寺の鐘声を聞いていたであろう。



〔補 注〕

韓式系土器（軟質土器）の出土地

市之郷遺跡は、古墳時代に韓式系（かんしきけい）土器（軟質土器）の出土例が多いのが際立った特徴で、類例の一部を挙げる。

□市之郷遺跡（県第5次調査地）—古墳時代の集落—

市之郷廃寺の築地外になる調査地で時期の異なる多くの遺構が確認された。

古墳時代の竪穴住居跡は、前期3棟、中期4棟、後期20棟。うち、13棟には竈があり、オンドル状遺構や韓式系土器（甑（こしき）・鍋・平底鉢・甕・壺などの炊飯具）を有する住居跡が4棟ある。算盤玉形紡錘車（ぼうすいしゃ）も出土しており、渡来系女性も暮らしていたようだ。家族で移住してきたのであろうか。鉄滓（てっさい）も出土しており、鍛冶もおこなっている。

住居跡には「壁により上屋を支える構造（大壁造り）」と考えられるものもある。大壁造り建物は、「風土記 韓室里（からむろのさと）」に記載される「韓室」であろう。渡来人の集住が推測できるムである〔県2013〕。

「渡来人の住所録」ともいわれる韓式系土器（軟質土器）が出土した調査地は他に、姫路市調査の姫路駅周辺第3地点（第2次調査）で、「古墳時代後期の竪穴住居跡内からまとまって軟質の韓式土器が出土」している。

この調査により集落跡の遺構は東西約650mにも広がる遺跡であることが確認された〔姫路市1999〕。

JR山陽本線高架工事（県第1次調査地）の古墳時代中期初頭の竪穴住居跡からも韓式系土器が一括出土している〔兵庫県2005〕。この出土遺物は、**兵庫県有形重要文化財**に指定されている。

組紐文（くみひもん）で装飾された最古段階の**初期須恵器**も出土しており、南東約1.5kmに所在する**宮山古墳**被葬者と関係ある渡来集団の居住が推測される。

韓式系土器の出土については以下のように評価されている。「市之郷廃寺が創建されたD区で、前段階に初めて韓式土器が認められた。この動きが市之郷廃寺の創建につながった可能性も考えられる」。

市之郷遺跡

・県営姫路日出住宅建替地 — 古墳時代後期の集落

市之郷廃寺の北東。古墳時代後期の竪穴住居跡が21棟、掘立柱建物跡が5棟確認された。竪穴住居跡には一辺10mを超えるものもある。

古新羅系軒丸瓦

市之郷遺跡（兵庫県2005）の報告書では、単弁系の軒丸瓦について「古新羅系の系譜上にある」とされ、**法興寺跡**（朝来市和田山）出土瓦と多可寺（たかでら）廃寺（多可郡多可町）と比較検討されている。

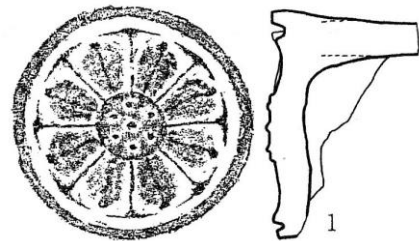
市之郷廃寺創建瓦の年代については、「7世紀後半に位置づけられ、さらに7世紀第3四半期まで遡る可能性も考えられる」とされる。法興寺跡はどうだろうか？

法興寺廃寺（但馬国朝来郡）

円山川東岸の山裾に位置する。個人住宅建設に伴う発掘調査により、古新羅系の特徴をもつ軒丸瓦が1点出土した〔右図〕。埴仏（せんぶつ）も出土している。寺院遺構は確認されていない。

円山川西岸の式内・赤淵神社境内には塔心礎が残るが神宮寺のものかもしれない。

菱田氏〔2013〕は、「有稜八弁のもので、一見すると古新羅的な様相を示す。日本列島内での伝播関係を示す資料もなく、直接的な伝播によるものと考えられる。時期的にも7世紀第3四半期としてよく、三輪君根麻呂の帰国にともない、僧侶や技術者が渡来した可能性」を指摘されている〔注〕。



素弁八弁蓮華文軒丸瓦

〔注〕

三輪君（みわのきみ）根麻呂 百濟戦役に参加した将軍

・『日本書紀』天智二年（663）三月条

「中將軍（そひのいくさのきみ）三輪君根麻呂」

＊救援軍27,000人を指揮した3人の将軍の一人

・「粟鹿（あわか）大明神元記」（宮内庁所蔵）

神部直（みわべのあたい）根マロ（門+牛）は、斉明天皇の時代に但馬国の民を率いて新羅との戦いに参加し、帰国して朝来郡大領（郡司のトップ）になった。

『兵庫県史 史料編 古代1』兵庫県 1984 p591

＊式内・粟鹿神社は朝来郡に位置する

市之郷廃寺

土壇

孤松と木の陰に
観音堂が見える



塔心礎

現観音堂に
移されている



〔鎌谷1942〕
より

■阿保遺跡第2地点〔姫路市2002〕

市之郷廃寺址の南に隣接する。奈良～平安時代の遺物に越州窯青磁(越磁)・円面硯・風字硯・緑釉陶器・石帯・瓦など出土した。立地から推測すれば、市之郷廃寺に関連する施設の可能性があるか？

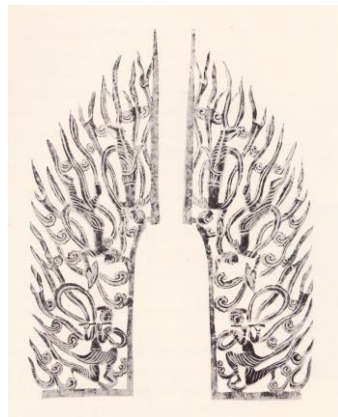
高位の官人が使用する蹄脚硯(ていきゃくけん)が2点出土しており、越磁ともあわせ、国府あるいは寺の重要な施設が存在したのであろう。

軒丸瓦は播磨国府系瓦の長坂寺式と推定されている。

■塔相輪



■水煙



水煙が十字形につく
薬師寺東塔

■引用・参考文献

- 和田山町教育委員会 1998『法興寺跡』
但馬国府・国分寺館 2007「ニュース」第10号
兵庫県教育委員会 2005『市之郷遺跡』
—JR山陽本線等連続立体交差事業Ⅰ—
兵庫県立考古博物館 2011
『市之郷遺跡Ⅲ—姫路警察庁舎—』
兵庫県立考古博物館 2013『市之郷遺跡Ⅴ』
—ものづくり大学校整備事業—
兵庫県教育委員会 2005『姫路市 豆腐町遺跡Ⅰ』
—JR山陽本線等連続立体交差事業Ⅱ—
兵庫県立考古博物館 2007・2008
「ひょうごの遺跡」64・68・69
姫路市教育委員会 1999「姫路駅周辺第3地点遺跡」
『TSUBOHORI 1997年度』
姫路市教育委員会 2002「(仮称) 姫路駅周辺第3地点遺跡」
『TSUBOHORI 2000年度』
姫路市教育委員会 2002.5.26 *現地説明会資料
「阿保遺跡第2地点の発掘調査(第1次)について」
姫路市埋蔵文化財センター 2009.11.28
「豆腐町遺跡 発掘調査現地説明会資料」

姫路市埋蔵文化財センター 2010.4.25

「発掘調査速報展 2010」

姫路市 2010『姫路市史』第七巻下 資料編 考古

鎌谷木三次1942「市之郷廃寺」『播磨上代寺院址の研究』

佐藤 信 2007『古代の地方官衙と社会』山川出版社

田中弘志 2008『律令体制を支えた地方官衙

弥勒寺遺跡群』新泉社

寺岡 洋 2008「姫路駅周辺の渡来関連遺跡を見る」

『むくげ通信』228 むくげの会

寺岡 洋 2015「伯耆四王寺と山陰道の古代寺院」

『むくげ通信』273 むくげの会

今里幾次 2010「市之郷廃寺」『姫路市史』第七巻下

菱田哲郎 2013「白村江戦闘以後、日本の渡来系寺院に

みられる百濟佛教の影響—瓦當を中心に—」

韓国国立扶餘文化財研究所主催学術セミナー

*発表資料(ネットによる)

岸本一郎 2014「市之郷廃寺の調査成果」

*考古学研究会関西例会 発表資料

垣内拓郎 2015「播磨国 市之郷廃寺出土瓦の検討」

*歴史考古学研究会 発表資料